瑞浪の世界一巡りと
小里川(おりがわ)ダムの紅葉

2006.11.24

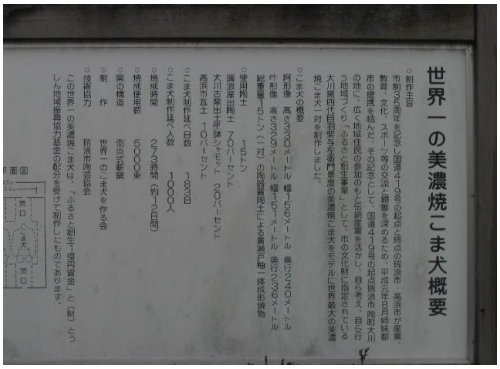
11 月 24 日久しぶりによいお天気だ、数日前にもらった友からの情報をもとに瑞浪市と恵那市へ出かけた。

世界一の美濃焼き狛犬

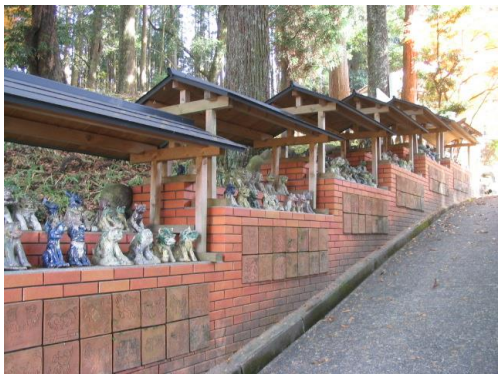
9.30”に家を出て知多半島道路から東海環状道を走って、せと品野台 IC で降りて国道 363 を明智に向かう。インターをでてから 15km ちょっと思われるが、かなりの峠道を走る。運悪く大型ダンプの後ろについてしまい、ゆっくり走るしかなかった。でもおかげで周りの紅葉と黄葉を楽しむことができた。ゆっくり走ると景色はきれいなんだ。

そして豊田市小原方面からの国道 419 がぶつかる大川の交差点角に最初の世界一が見えた。すぐ近くの駐車場に車を停めて見学する。
説明によると、国道 419 の基点と終点の街である高浜市と瑞浪市の、交流を深めるため平成 8 年に姉妹都市の提携を結んだ。
それを記念して造られた美濃焼きの狛犬である。その材料の粘土は高浜市と瑞浪市の両方のものが使われている。高さ 33m、重さ 15 トン(一対)もあるため、製作はこの場所でまず狛犬を作りそれを包むように窯を作って焼き上げたのだ。

迫力があります



隣には製作過程が分かるように陶製のバネルが並んでいる。それにしても何故こんなものを造ったのか、説明を見てうなずけた。竹下内閣の時のバラマキで有名な「ふるさと創生事業」の一つなのだ。


趣のある陶製品が並ぶ

八王子神社の楓

確かに美濃焼きの地をPRするものとして悪くはない、が1億円の活用ということでの優先度はどんなものだったのかな??.....隣の坂道には趣のある陶製品が並べられている、そしてその先には八王子神社の楓が真っ赤に染まっているのがとても印象的だった。
周りにはのどかな山村の風景が広がり、心休まる思いだった。

もう一つの世界一は茶壷

友の情報ではこの近くに世界一でかい茶壷があるとあった、がそれらしい案内は何もない。やむを得ず車で走り出したら100mも行かないうちに案内板が目に付いた。狛犬のすぐ裏手にあったのだ。
地元の陶町街づくり委員会の事業として平成10年にスタートし、茶壷の製作、焼成にはお年寄りから子供たちまで5000人の地域住民総出により出来上がった。そしてギネスにも認定されたとある。高さ4.5m、直径4.0m、使用陶土は32tという代物である。これも実用価値のあるものではなく街のシンボルとして、住民みんなが作ったところに大いなる意義があると感じた。

中馬街道は商いの道

この茶壷の隣に中馬街道の案内板があった。中馬街道は足助の街を歩いて、三河から飯田方面への塩の道という認識でいた。
説明では、「信濃 美濃 三河 尾張 商いの道」というタイトルで説明があった。それによると、中馬とは信州方面の百姓の間に発生した副業で

ある。江戸初期に自分の荷を運ぶことに始まり、寛永の頃には商品を運送するようになった。

世界一の茶壷

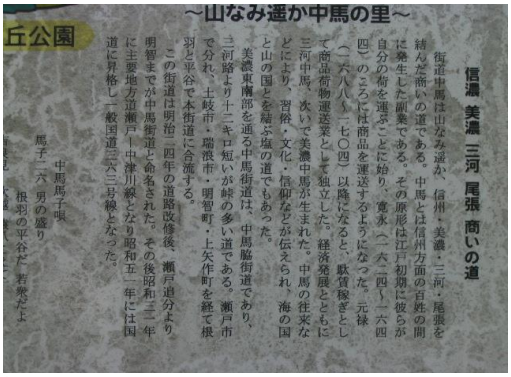
上段左がギネスの認定書

茶壷の周りにはこんな絵になる景色も……

さらに元禄以降になると、駄賃稼ぎとして商品荷物運送業として独立したという。経済発展と共に三河中馬、美濃中馬が生まれた。その往来により海の国と山の国とを結ぶ塩の道でもあったのだ。

道の駅「おばあちゃん市. 山岡」

そんな歴史の勉強をして、今度は日本一の水車がある恵那市山岡町の道の駅「おばあちゃん市.山岡」へ。
国道 363 を少し走った大川の交差点で左折し、瑞浪駅方面へ向かう。この通りからは右側へ行くのだが、道の駅の案内があるだろうと車を進めた。途中にすばらしく高い道路橋があった、こんな田舎にと思った。



中馬街道の説明

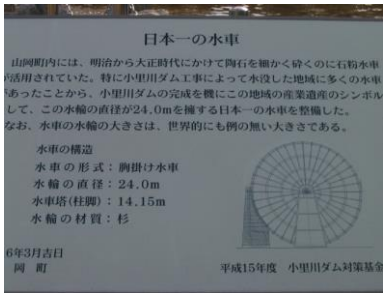
しかしいっこうに案内が現われない。川を渡った所で、川沿いに行けばよかろうと判断して右折した。が、雰囲気がおかしい、山あいの景色ではなく街並みが続くのだ。これはやばいと直感し、目に入った JA に入って道を尋ねた。受付のお姉さんが親切に教えてくれたのは、今来た道を信号のあった橋まで戻らなくてはいけないというのだ。
先ほど右折した交差点まで戻ると、少し先に道の駅の案内板が見える。何のことはない右方面なので右折したのが間違いで、左折してぐるっと回って行くのだ。地図をしっかり見ておかなかったのが間違いだった。拡大地図で見ていたので、分岐点をしっかり見なかったのが原因、もっともナビを使わないのも間が抜けているといえる。大川から来た道を左折して進むと、来る時に見た高い道路橋を渡る、安全のために橋の両側は高いフェンスがあり景色は見えない。きっと素晴らしい眺めと思われるのだが。橋を渡り終えると道はゆるやかにカーブをして、その先に大きな水車が見えてきた。やれやれこれで間違いなかった、到着したら丁度 12.00”だ。

山の上に日本一の水車があるのは??

お休みでもないのに駐車場は満杯で多くの人が来ていた。道の駅はダムのほとりの高台にあり、周りは紅葉、黄葉が美しい。

今年初めての紅葉見物が出来た、山の空気と景色はすばらしい。この景色には感激。さっそく食事にしようと道の駅に入る、が、かなり混雑している。食堂は一杯の人で入り口は食券を買う人でごった返している。

日本一の水車



すぐあきらめて売店でお弁当を買うことにした、私はちらし寿司、妻はおこわ弁当にした。これがなんと 315 円とてもお安い、2 人で 630 円の昼飯になった。ダムを前にして野外で食べるといっそうおいしい、食堂で食べずに良かったとつくづく思った。ちなみに食堂のメニューはおふくろ定食 650 円、寒天ラーメンは 550 円だったかな。山岡は寒天の町なので寒天製品のお土産がたくさん並んでいた。

　ところで何故水車があるのか、この地域では陶土用の砕石製造の動力として水車が利用されていた。ダムによってなくなった昔の風景を再現するために造られたもので、直径 24m の水車は木造では日本一の大きさという。それにしても山のてっぺんに水車が現われるとはびっくりだ。もう一つ町指定文化財の石橋「興運橋(ようんばし)」が移設して展示されている。これも立派なアーチ橋である、通称めがね橋と呼ばれている。

さらに芝生の端っこには、大正時代に活躍した水車.発電機が産業遺産として展示されている。アメリカの GE 社製で最大 200kw の発電をしたとある。

エレベーターで高さ 114m のダムの下へ

道の駅からつり橋を渡って、ダムまでは遊歩道が整備されている。つり橋を渡った所にダムの管理事務所があり、「ふれあい館」としてダムの説明コーナーがあった。

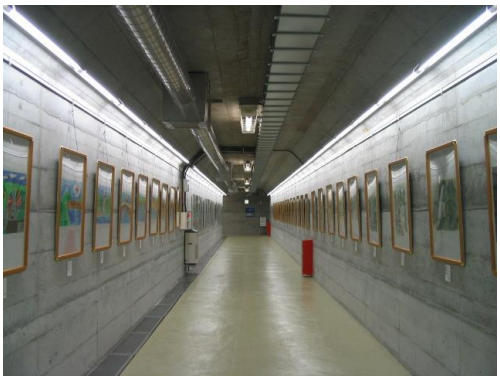
道の駅から見たダム

そこには多目的ダムとして作られた経緯や、規模などと生物の説明がされていた。それにエレベーターでダムの下まで降りて見学が出来ることまたダムの堰堤の中には、作品の展示コーナーまであることが分かった。
暖かな陽射しを受けて歩く遊歩道は、ドウダンツツジの赤色がとても鮮やかなのが印象的だ。

遊歩道の景色

ダム 2F からの眺め

2F から見上げたダム


ダムの中の画廊

ダムからの眺めは山並みの紅葉が美しく、広々とした空間にいる素晴らしさを体感できる。エレベーターで 1F へ降りると、そこは通廊で両サイドには子供たちの絵をはじめとする作品が展示されている。
こうした試みは、殺風景なダムに温かみを感じて良いと思った。外に出てダムを見上げるとさすがに高い、圧倒される大きさであることが分かる。今度はダムの途中に作られた 2F 展望室へよってみる。高さの違う所からの景色はまた違った風景を見せてくれる。
それにしても、これだけのダムを造るのはとても大変なことだろう。人間の営みのすばらしさを感じた一日となった。